「山陰文芸」57号 寸感記　　洲浜昌三

同人誌のいいところは、作品を互いに合評し合う中で多角的な見方を学べることです。苦心して書いた作品に何の反応もなかったら同人誌の意義は半減します。合評会があっても遠隔地の会員も多く参加者は限られてきます。

そこで、編集者の依頼もあり、前号の感想を書いてみました。限られた紙幅で34作品を取り上げることは不可能です。随筆と小説の寸感を書くことにします。

雑誌の顔である表紙（鷲見五郎）地方色があり色彩豊かで毎号惹きつけられる。同人誌としてトップ級。**「回想国民学校一年生」（黒田邦宏）**出雲出西の終戦前後のことが具体的に書かれている。体験と実感で書ける人は少なくなり記録としても貴重。

「八月に思う」（加藤正子）無駄のない引き締まった文章で母から戦争体験の悲劇を聞いたことが書かれ「母の歴史は私の中で生き平和を守ることになる」。テーマもしっかり伝わってくる。

「美しき物語（シベリア鉄道が歴史を紡ぐ）（長沢敬）落ち着いた文章でドイツの家庭の様子、人々考えがリアルに伝わる。広い世界、誰にも書けない体験と見識。新たに知ることが多い。

「世界平和の鉄道」（森山秀幸）独自の発想は面白く貴重。短い童話に多種多様な場面や視点が出て来るので印象が散漫になる。童話として書くならテーマを絞ってスッキリとさせた方がいいと思った。

「スーパー拭き子さん」（木本智子）テンポの良い心温まる好短篇。一貫した富貴子さんの善意と自身の新たな人生に拍手！洒落た題も素敵。

「桃色の味」（浪花涼女」小説の展開はないが、すっきりした回想。親しみのある絶妙な大阪弁の会話が活きている。消えていく昭和の子どもたちの風景が心に残る。

「絆の証し（三）」（唐島宅）この（三）だけではこの小説の重さは伝わらない。（一）から読んでいるので小説に向かう作者の真摯な姿勢に感銘を受け作品に感動する。様々な問題を起こす生徒の光子と先生の関係。いつも期待させ期待を裏切る光子。そこに甘さや嘘はない。人間の真の姿だ。胸に突き刺さる。完結編を読んでタイトルの意味が立ち上がった。

「最後の鳥取藩主」（内藤丈二）歴史物は資料調べと確認に時間が取られる。数字や名詞は怖い。毎号力作を寄せる作者に脱帽、敬礼！客観的な視点で書かれ、鳥取藩や藩主たちが果たした役割がとてもよく分かる。

「布都外伝（六）」（沢村俊介）僅かな資料を基に壮大なフィクションで古代出雲のクニ作りを描いた最終回。石見銀山や古代出雲に場を求めて小説に描く作者の情熱に拍手！細かいことを書いていると長くなり平板になりやすい。メリハリがつくと読者も緊張感が生まれる。

「とおせんぼ」（佐藤サナ）前半のカタコトを喋る女の場面までは情景が浮かび期待を持たせる。短い中に次々と一四人の名前が登場するので関係を理解するのに頭を使う。続きものなので次号に期待。

記録、随筆、俳句、詩、川柳の作品はコメントできませんでしたが、それぞれの味を楽しませて頂きました。筆者（洲浜）はエッセイ**「石見銀山の小説と詩」**を書いた。直木賞を受賞した千早茜さんの小説「しろがねの葉』の豊かなイメージに感銘して、中村ブレイスの前庭にある松本清張の石碑「空想の翼で駆け現実の山野を往かん」を触媒にして「個と普遍」の重要性について書いた。